

# 「特集」みんなのフットボール アクセス・フォー・オール・オールの取り組み 日比野 暢子 JFA理事

日本サッカー協会（JFA）は今年2月、アクセス・フォー・オール（AfA）のワーキンググループを設置し、2024年1月のAfA宣言に向けて議論を重ねている。AfA構想やサッカー界がそれに取り組み意識について、ワーキンググループのリーダーである日比野暢子JFA理事、日本障がい者サッカー連盟（JIFF）理事／桐蔭横浜大学スポーツ科学部教授に話を聞いた。

取材日：2023年9月22日

アクセスしたいとき、  
誰もが当たり前前に  
つながることのできる  
サッカー界に



## ■アクセス・フォー・オール（Access for All / AfA）宣言に向けた構想

誰もが当たり前前にサッカーにアクセスできる多様な「機会」と「選択肢」を持続的に届けることで、豊かなスポーツ文化と共生社会の創造に寄与する。

### 届かなければ意味がない デリバリーという考え方を

— 最初にアクセス・フォー・オール（AfA）について教えてください。

**日比野** JFAが今回のAfA構想で大事にしたいと思っているのは「誰もがフットボールにアクセスできること」です。つまり、サッカーをやりたいと思ったときにサッカーができる環境があること、サッカーの試合を見に行きたいと思ったときにに行ける手段があり、スタジアムの環境が整備されていること、サッカーに関わりたい、サッカーを支持したいと思つたときにそれができることを当たり前前にしたいということなんです。ですが、これまでの社会は、成人男性を基準として施設や社会構造などがつくられてきました。このことは、世界的にも指摘されています。この傾向は、おそらくス

ポーツ界にも当てはまるでしょう。AfAのワーキンググループでは、LGBTQの方を含むジェンダー（生物学的な性別ではなく、社会的・文化的につくられる性差のこと）や障がい、外国人（人種）、貧困といったテーマ別に、有識者の下で議論を進めてきました。なぜなら、全てのマイノリティーを含むサッカーファミリーの全員を対象としていることが重要であると捉えているからです。

ワーキンググループでは、共通する課題があるとの見解を持っています。サッカーにつながるのではないのは個人のせいではなく、ちょっとした仕組みやアイデアがあれば、もっと多くの人がサッカーファミリーとして活動できるのではないかとという視点です。障害学という学問には「社会モデル」という考え方があり、その考えは、社会が障がいをつくるというものです。もう少しかみ砕いていけば、例えば、育児中の選手がその期間もサッカーにつながる仕組みをつくり出さない限り、サッカーを中断せざるを得ないのではないかとといった視点や、障がいのある人がスポーツ観戦に行きたいと思つてもその環境が整備されていないといった視点です。

Japan's Wayには、サッカーファミリー1000万人とFIFAワールドカップ優勝と示されていますが、優勝するような国は多くのサッカーファミリーが当たり前前にサッカーを楽しむ社会になっています。サッカーが好きだから関わるという従来のファミリーも当然ながら大事ではあります。日本にはサッカーにうまくアクセスできていない、つながれていないという人たちがいることをもっと認識すべきです。そういう人たちが排除してしまっているかもしれない、それはもったいないことである、という視点に立つことがAfAの原点です。

AfA構想では、誰も支えるという視点から、誰もがサッカーにアクセスできるような社会を目指しています。フォー・オールは直訳すると「みんなのために」となりますが、転じて「誰もがサッカーにアクセスできること」という意味です。そして、その中で最も大事にしたい考え方が「デリバリー」です。（\*スポーツ基本法の規定に基づき、文部科学大臣が定めるスポーツに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための重要な指針として打ち出された第3期スポーツ基本計画にもアクセスという言葉が使用されている。）

— デリバリーは「届ける」という意味ですね。

**日比野** 私がこの言葉を最初に聞いたのはイングランドでした。誰かを支援する際、日本では「サポート」という言葉を使いますが、イギリスやオーストラリアなどでは「デリバリー」と表現します。イングランド



アーセナルFC（イングランド）では、見た目に分かりにくい障がいや疾患のある人（糖尿病など）にACCESSと書かれたバンドを配布して、スタッフが試合会場などで声掛けができるようにしている

るために、行動や規則などを変えていくことが求められますね。

**日比野** 21年に開催された東京オリンピック・パラリンピック競技大会を機に、日本におけるジェンダーや障がいに対する意識は少しずつ変わってきたと思います。私はスポーツ政策学を専門としています

が、私の博士課程の指導教官であるフリーハン教授（イギリスラフバラ大学）は「スポーツ政策（ポリシー）は風邪薬ではないから、明日いきなり変わることはない。でも、10年後には必ず変わることおっしゃっています。AfA宣言をいま出すということは、27年後の2050年には必ず何かが変わり、誰もがサッカーにアクセスできる社会に変わっていくものと信じています。

先日、仕事でイングランドを訪れた際にプレミアリーグを観戦しました。ある試合では、障がい者の方がボールパーソンをされていました。自分はサッカーが好きだからサッカーを支えたいと思った障がい者が、ボールパーソンとして関わることができて。つまり、「あなには障がい者だからダメですね」ではなく、やり方を変え、工夫することで社会は変わっていくということです。何か一つ工夫すれば一緒にサッカーができる、一緒にサッカー観戦ができる、一緒に応援できる。これまでの前例や固定観念を取っ

のスポーツ関係者に聞くと「君はピサを頼んだことがあるかい？ デリバリーは届かなくて意味がないだろう？ 支援（サポート）は一方的だけど、デリバリーはちゃんと届くことが大事という意味ではないんだよ」と説明してくださいました。届かなければ意味がない、私はこの言葉と考え方をAfAで最も大事にすべきものだと思っています。

### 社会は変わっていく、 みんなを変えていく

— ワーキンググループを立ち上げてからこれまで6度の話し合いの場が設けられました。来年1月のAfA宣言に向けて議論を進めるにあたり、あらためてお考えになつてはいますか。

**日比野** サッカーを介して全ての社会課題を解決することは難しいかもしれませんが、サッカーだからできることはある、と考えています。何より、AfA宣言はJFAだけではなく、リーグ、WEリーグ、Fリーグが共同し、サッカー界として目指す方向性を示すという意味でも非常に重要です。まずは、日本サッカー界が一体となつて、誰もがアクセスできる環境を目指していくんだ、というメッセージを発信することで、サッカーに関わりたいたいと思う人が増えてい

## JFA 2005年宣言、そして2014年のグラスルーツ宣言からさらに積極的に前向きに「2050年の約束」を実現していくために、2024年1月にアクセス・フォー・オール宣言を行う。



— AfA宣言をきっかけとして日本サッカー界全体で取り組んでいくと。

**日比野** AfA宣言の下、各団体やリーグ、チームなどがそれぞれの取り組みを進めてくれたらと考えています。方法はさまざまいいと思っています。ただ、例えば「ジェンダー課題（LGBTQの大会参加など）や障がい者の観戦などに関わるアクセシビリティに取り組むときには、その分野を専門とする組織やグループで対応することも検討しています。

— みんなの意識や考え方を

変えるために、行動や規則などを変えていくことが求められますね。